
心の葉 さくらんぼ

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の葉 さくらんぼ

【Nコード】

N5199B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

小さなきつかけ。だけど、もつもどらないの？むかしは違ったよ
うな…。会いたい…。

「いや、知らないから！　つか、ほかに飯は？」

「だから、何にも買っていないのにどーやって作んのよ！」

「何にもないって、ちよつとぐらいなんかあるだろ？」

「ていうか！　あんたにご飯なんて作りません！」

「はあ？　何それ」

「外で勝手に食べてくればいーじゃん？」

言い過ぎたのはあたしのほう。本当に出ていっちゃうなんて予想もしなかった。ケンカの原因はただ、買ってきてって頼んだ食材を彼が忘れてしまったってだけで、今日は別に何の記念日でもなく絶対にこれを食べようと決めていたわけでもないけれど、仕事疲れの夕食作りがあたしを苛々させていた。ああ、もう本当にはかだ。走って追えばまだ間に合ったかもしれないのにあたしの身体はほぼ硬直してしまって、行動を起こそうとはしなかった。こっちのほうが柔らかくて、温かい。そうやって決めた薄くオレンジがかった蛍光灯があほらしく見えてしょうがない。割って、暗闇を部屋に入れたいくらいだ。クーラーももう暑がりの彼がいらない以上役割がない。

「はああああ。やばいよこれ」

小さなことでもそれがきっかけで破局とか、ありえるんだからね？

だれかにそう言われたのを思い出す。もう、それを思い出せばまもなく涙がぶわっと流れ出た。…どうしよう。

彼と知り合って七年。付き合って四年。こういうことって一回でもなかったような気がする。高校からの付き合いだから、大抵のことはわかっていふつもりだし、向こうだって同じだと思っていた。それが幸せで、あたしの全てで、それで満足だった。もしかしたら彼はそんな日々にマンネリを感じていたのかもしれない。普段からだから、うまくきっかけを見つけてでてってしまったのかも。こう

いうときに人は俯いたまま顔を上げられない。…どうしよう。

「ただいま電話に出ることが…」

友人に電話をしてみたけれどあいにく留守だった。あたしは一気に支えていたものがなくなつて地面に叩きつけられた気がした。ただでさえ背が小さいのに、これじゃ彼の顔をうまく確認できない。…どうしよう。

ゆっくりと目を瞑ると映つたのは以外にも彼ではなく自分自身の姿だった。それも高校生のときの自分。うわつ、と言いたくなるほどにはつきりと見える。草の匂いと、虫の鳴き声がしてくるとそこが河川敷だということに気づく。

「ねえ、知ってる?」

後ろから声が聞こえてきた。あたしは自分を見るのをやめて振り返る。するとそこには彼がいて、その彼も同様に高校生である。そこでやっと気がつく。これは夢なんだなつて。でも、心地がいいから見てることにする。

彼は笑つて、続ける。「俺たちつて、もう大学生になるんだよ」

「へ、知ってるよ?」

あたしはとぼけて言う。夜の河川敷は暗くて、でもふたりははつきりと見えた。

「そうだよな、卒業式してきたんだもんね」

「そうそう。けど、実感ないよ。もう自分が大人になるなんてさ」

「俺もなんだ。なんだろうーね、この気持ちは。なんていうか、…ねえ」

「なんかわかると思うよその気持ち」

「おお、やっぱりか。俺たち、気が合うのかな」

「何をいまさら」

「…付き合おう」

「うん、いいよ」

「え?」

「え? つてなによ」

「だって俺、告白しちゃったんだよ？ お前に」

「聞いてたよ。あたしも好きだよ。気が合うからね」

「そっか」

「ていうかさ、なーんか、こーなると思ったんだよねえ。…あ、別に自惚れてるわけじゃなくってね」

そう言ったのは本当にそう思っていたから。ずっと、付き合ってるんじゃないのっていう噂もあって、そのたび否定していたけれど一緒に高校時代っていう貴重な時間を過ごして、もうこれは運命で決まっているんだな、とこっそりと思っていた。甘酸っぱい。これですっごく甘酸っぱい。まるで取れたてのさくらんぼのように。

ヴー、ヴー、ヴー。

携帯の振動で目を覚ますと、友人からのメールが入っていた。

「自分に素直になるがいい」

と書いてあって、最後にさくらんぼの絵文字。なぜあたしの状況がここまでわかったのか、それはきっと親友だから。

さて、ご飯でも作ろう。今日作ろうと思っていたのはできないけれど、なんとか彼の大好きなシチューくらいならできそうだ。

電話はそれでも怖かったから、メールを打った。

「ご飯、食べてない？ 君が大好きなシチューを作って待ってます」
窓が映す今夜の星はただ小さく光っているだけだから、あたしは流れ星の絵文字をつけて、ああ、なんて綺麗なんだろうとそれに見とれた。

届け、彼のもとへ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5199b/>

心の葉 さくらんぼ

2010年10月11日02時37分発行